

Henry James 1843 — 1881

— James (前期) の生涯と作風 —

枋 原 知 雄

I

アメリカでは、幌馬車が西へ西へと、オレゴン (Oregon) へ、カリフォルニア (California) へと進んでいた。フランスでは、ルイ・ナポレオン (Louis Napoleon) が Napoleon 三世となった。イタリアやドイツでは、国家主義へ戦争へと国家統一の準備がなされていた。イギリスでは、急進主義者 (the Chartists) が、ロンドンの街路に密集し、又希望なげに行進していた。

Henry James は、このような時代に生まれた。詳しく云えば、1843年4月15日 New York 市の Washington Place に生れ、1916年2月28日 (英国に帰化した翌年、The Order of Merit を授った年) Chelsea で最後の息をひきとった。此の時期を73年間、文学の為に生れて来たようなものであり、文学の為に生きぬいたと云える。James の生涯は、このように、文学者として長いものであるが、決して eventful なものではなかった。「心の遍歴」に於ては甚だ eventful ではあったが、所謂、生活行動につきまとう事件と言う程のものは (二・三を除くほか) なかった。F.W. Dupee も “In all but physical adventure and sexual passion his was an eventful life.”¹⁾ と書いているし、又、Morton Dauwen Zabel も “Outwardly viewed, his career was unspectacular. It was the art and mind by which he enriched it that made it a great life and that continue to make James one of the most interesting figures in the drama of the past century.”²⁾ と書きとどめている。

筆者は、これから、Henry James の生涯と作風 (又、此の二者の関連) について、信頼し得る伝記と James の諸作品や手紙や覚書や自伝^(a)^(b)^(c)などを基にして書き上げてみようとするのだが、James のように、文学活動が長期にわたり、質、量共に豊かな作品を生み出した作家の全貌を余すところなく、この小論では述べ尽せないで、ここでは、James の生い立ちのうちで、特に若い頃起った三つの出来事を主に、若き Henry James の姿を描きつつ、James 文学の特質にもふれ、生い立ちの及ぼす文学への影響も考察し、進めて行かうかと思っている。

先づ、生い立ちからはじめる。だが James 文学の特質とそれへの影響に余り関係のないことは簡単にしておく。祖父 William James (Henry James の兄と同名) は、1793年、アイルランドからアメリカに渡来して New York 州 オールバニイ (Albany) で、商業を営み (タバコ・塩など)、又、運送土地業なども経営し、多額の財産 (約200万ドル) を作ったと云うことであるが、父 Henry James Sr. (Henry James と同名) は、祖父からの家業を継がずに、哲学・宗教を研究し (逍遙学派の哲学と反制度的宗教)、エマソン (Ralph Waldo Emerson 1803—82) や、カーライル (Thomas Carlyle 1795—1881) の友人であり、スエーデンボルグ (Emanuel Swedenborg 1688—1772) を崇拝した。父 (William James) と母 (Mary Walsh James) に連れられて、生れて六ヶ月めの Henry James は兄 (William) と共に、ヨーロッパに行き、フランスや英国 (Windsor) に滞在する。1845年に弟が生れ (1883年

没), 1846年にその次の弟が生れ (1910年没), 1848年には妹アリス (Alice) が生れている。

1855年から1858年, 再び家族はヨーロッパに旅行する。ジュネヴァ (Geneva), ロンドン (London), パリ (Paris) そして ボン (Bonn) と移り住む。Henry James が, 十才を少しこえた少年の目で, ヨーロッパの偉大さと, パリーを意識した。とりわけ, ルーヴル博物館に異常な感銘を受けたのは此の旅に於てであった。子供達への教育は, 広くヨーロッパで授けねばならぬと云う父の考えからであった。此の間 Henry James は, 外国で感性的な (“sensuous”) 教育を受けているが, 此の精神的文化の泉に於て洗礼を受けた事は, James 文学の特質と作風に無形の影響を与えた最初の出来事と云える。James の自伝とも云うべき “Small Boy and Others”⁴⁾ に幼時に受けた印象が詳細に書かれている。生れつき敏感な感覚で受けとめたヨーロッパの印象は, 一生涯消えぬものとなったのである。

James の家族は, 更に, 1859年から1860年へかけて三度目のヨーロッパ旅行をする。ジュネヴァ (Geneva) やボン (Bonn) にいた時, ラファージュ (John La Farge) と親交を結ぶ。このように James は, ヨーロッパの各地に於て, 実験的教育の断片を受け, 一定の土地に於てでなく各地で変化ある人間的土壌をあたえられることになる。Henry James の cosmopolitan としての, 又 expatriate の性格の生れる最初の環境である。此の間, James が身につけた事は色々あったであろうが, 特筆すべきことは, ヨーロッパ文学 (特にフランス文学, それについて英国文学) への関心, 文学へのめざめであり, フランス語を身につけた事であつたらう。

1860年 (17才の時) には, ミュッセ (Alfred da Musset) やメリメ (*Vénus d'Ille* Mérimée) のものを翻訳したり, 又, バルザック (Honoré de Balzac) のものをあさり読んでいる。H. James が, フランス語に関する最初のタレントを発揮したのも此の頃で, フランス文学の James への影響は, これ以後ますます濃厚となる。此の頃はフランス語とフランス文学の造詣を深める出発点

となった。H. James のフランス語の豊かな才能を物語る確証は次の Edith Wharton (1862—1957) の言葉が言いつくしている。

“James's simple cordiality would have made him welcome anywhere; but he was particularly among his French friends, not only an account of his quickness and adaptability, but because his youthful frequentations in the French world of letters, following on the school years in Geneva, had so steeped him in continental culture that the cautious and inhospitable French intelligence felt at once at ease with him. This feeling was increased by his mastery of the language. French People have told me that they had never met an Anglo-Saxon who speak French like James; not only correctly and fluently, but — well, just as they did themselves; avoiding alike platitudes and pomposity and using the language as spontaneously as if it were his own.”⁵⁾

I

次に, Henry James の生涯に於て, 只一つとも云ってよい physicial adventure に出会う。それは 1861年に起った, 所謂, 「不明の負傷」 “obscure hurt” なるものであるが, この事件は Henry James の伝記で利用し得べきすべての材料を基としないで, 軽率に紹介されやすいものである。James を論評する伝記作者の中にも, Henry James が一生涯結婚しなかった事, 又, それと共に James の物語や小説のあるものの中で取り扱われている Sex の問題が正常でないと云う例を指摘して, Henry James が sexually impotent だと推断したりするものもあることである。此の “obscure hurt” なるものは James の自伝に関するものにでも, 個人的 (Personal) なことなので, 明瞭に取り扱われていないのである。此の「不明の負傷」とは何であるか。ここに次の三つの信頼し得る文献に拠って要約整理して置くことにする。その三つは (I) “Henry James — autobiography” Edited with an Introduction by Frederick W. Dupee 中の “Small Boy and Others” (II) “The Untried Years 1843—1870 by Leon Edel. (III) “Young Henry James” by Robert Charles Le Clair⁶⁾ である。

此の負傷は前述のように、甚だ personal な事なので、James 自身が autobiography ではひかえめであって、むしろ、(Ⅰ)(Ⅱ)の著者の方が色の文献を総合して述べているようである。必要と思われるものを筆者が整理して書き留める。これは、余り知られていないのでやや詳しく書く。

1861年10月28日は強風の日であった。午後10時30分から11時の間に Beach and State Streets の角の Charles B. Tennant の大きな馬屋から火が起り、数分の間に全部が火災につつまれ、火は強風のため隣の John West の馬屋にうつり、遂に Barney M. McGowan の新築の住宅に迄ひろがった。No. 5. のエンジンのホースが現場までとどかないことがわかり、Redwood Reservoir で止められていた。此の時、a fire alarm にこたえて、Newport の若者達は William も Henry も含めて消火の手伝をするため volunteer firemen の一人としてに参加していた。Henry James の負傷はこの時の事である。充分な圧力で水を吸上げるために古風な蒸気ポンプが用いられて、その両側で蒸気ポンプの把手を動かすのに多くの人手を必要とした。此の仕事に手をかしていた時に、二つの高い外壁の極狭いところへおしこめられて、そこで両腕を上下に動かしていた時に、ひどくおしつけられたのであった。約十分ばかりの興奮と努力のあとで、Henry は脊がひどくねじれたことに気がついた。これが Henry James の受けた負傷なのである。その次の日から身体の運動が出来ず、又歩行さえ困難となって床にいたのである。少しよくなってから父と共に Boston の優秀な外科医の診断を受けるために出かけた。けれども、別に重傷というわけではなく、筋を違えたので充分休養すればよいと云うのであった。これが原因となって、その後、James は慢性の消化不良と便秘 (Chronic indigestion and Constipation) とに悩んだのである。兄 (William) も、不思議に同じ胃弱にかかり、Henry と、この後十年間程に交した手紙には、お互がこの病をなおすためのさまざまな療法に関し書いているようである。だが、二人はこのような personal な事に

関しては、あからさまに話し合わず、家族にも余り話さなかったらしいのである。

1861年は、丁度南北戦争勃発の年にもあたるが、此の負傷のため Henry は他の若者達のように、国難に当る名誉を放棄しなければならなかった。若し、Henry が負傷せず完全な身体で、南北戦争に参加していたとすれば、レベッカ、ウェスト (Rebecca West) が想像するように、James の精神はその性格を変えていたであろうと云うことも考えられるかも知れぬ。又、炸裂する火薬の炎上する森の光によって祖国アメリカをみたとするならば、再び祖国から目を離すことは出来ず、戦後未に起った風潮と組織の変化に祖国の姿をみつめ、アメリカ的なアメリカの大作家となったかも知れぬと想像することは確かに興味のあることではあろう。だが、しかし、此の James の負傷と云う事件があったために、James の文学の特徴とも云える International Situation の小説も、人間の内部動機を発見しようとする近代小説の技巧も生れたとさえ云える。つまり、此の負傷の為、敏感で内的な観察者性格がますます強められることになり、James の文学が生れ出る運命的な負傷であったとさえ考えられそうである。

Ⅱ

(Ⅰ) に於て述べた負傷のため、二人の弟達は従軍したが、Henry James は、南北戦争には参加出来ず、国難に当る名誉は放棄しなければならなかった。多感な James の心のなかは複雑であったに違いない。負傷兵の療養所を見舞って自分の心を慰めていたのである。

その翌年、1862年、Harvard University の法学部 (Law School) に入学したが、何故、法学部に入学したかはよくわからない。Robert. Le Clair も次のように書いている。

“Why Harry should have entered the Harvard Law School was always a mystery, even to himself ‘a singularly alien member’ of that department as he proved to be.”

法学部は勿論卒業しなかった。法律を学ぶ性格ではなかった。1864年、家族は、ニューポート

(Newport) からボストン (Boston) へ移る。此の年から James が、ノートン (Charles Eliot Norton), ロウエル (James Russell Lowell), ハウエルズ (William Dean Howells) と交わることになる。James の 21 才の時である。The Atlantic Monthly をはじめとして、雑誌社との関係を結びはじめる。これ以後、評論・短編・紀行文などを雑誌に掲載する。George Eliot (1819—80) の小説を読みはじめたのも此の頃である。George Eliot の影響は此の頃にはじまる。Le Clair も次のように指摘している。

“.....What brought him close to the work of George Eliot was a basic resemblance to his own tendencies. Her plots were artificial, even clumsy; the conduct of her story slow; her style diffused. On three points he knew himself to be weaker than the admired English novelist, but like her he hoped to compensate for these defects by a firm and rather elaborate delineation of individual character, by developing ‘that extensive human sympathy, that familiarity with man, from which a novelist borrows his real inspiration.....’ ”⁹⁾

1865年, 22才, ますます文学熱高まる。短篇, “The Story of a Year” は此の年の創作であり, 1866年, Massachusetts 州の Cambridge に移ってから, “A Landscape Painter” と “A Day of Days” (日本でも古く平田禿木の「千載一遇」という訳名で翻訳がある。) を発表。1869年, 四度めの外遊まで, 数篇の短篇を書いたが, この頃の James には, ホーソン (Nathaniel Hawthorne 1804—64) の影響を認めることが出来る。殊に “The Romance of Certain Old Clothes” には, アメリカ的な神秘性と怪異感をくみとっているようである。

以上は, いづれもアトランティック・マンスリ (The Atlantic Monthly) や, ギャラクスイ (The Galaxy) などに掲載された習作時代の作品と云える。

丁度, 此の時期に特筆すべき出来事は James の従妹 Minny Temple (Mary Temple と云うのだが, James の家族は minny と云ったり Minnie と書いたりしている。) との問題である。これを二人の恋愛事件という言い方で呼ぶことは適当と

思えぬ程, 二友の清い友情は深かったものである。むしろ, 永遠の友情とでも云うべきもののようである。此の女性が James 文学に思いの外関係が深く, 又作品と密接に結びつくものなので, 長篇小説「ある婦人の肖像」“The Portrait of a Lady” (1881年) に出場する Isabel Archer と「鳩の巣」“The Wings of the Dove” (1902年) の Milly Theale の原型 (prototype) となされる。Henry と Minny の友情は二人の幼い頃からで, New York の Albany 時代からはじまる。だが, Minny と Henry の清い友情或は愛情は深まって行く。1869年, Henry がヨーロッパへ外遊に出る迄, そして, 1870年, Minny が死ぬ迄続くのである。Minny の愛情は深くなり, Henry がヨーロッパに旅立ってから, Henry 宛に送った手紙は甚だ pathetic である。

‘I shall miss you, my dear—but I am most happy to know that you are well and enjoying yourself. I wish I were there too. If you were not my cousin, I would write and ask you to marry me and take me with you—but as it is it wouldn’t do.’¹⁰⁾

Minny の方で結婚まで望んでいた事はこの手紙で明瞭であるが, James の側では, この Minny の深い情をどのようにうけとめ, どうすればよいのか。此の事についての二人の心境については, “Henry James と Mary (Minny) Temple” と題し, 「Henry James の生涯と作風について」として詳しく論述して置いた¹⁰⁾ からその方にゆずることとするが, 1870年3月8日, Minny は病勢がつり (肺病 tuberculosis のため病身であった) New Rochelle に於て, 淋しく最後の息をひきとるのである。此の知らせが母から Henry に来た時の Henry の悲歎は, Henry の母と兄への二通の手紙がそれを明かにする。¹¹⁾

何故, Henry James は Minny と結婚をしなかったのか? そして又何故 Henry James は一生涯, 結婚しなかったのであるか? これを明瞭に語る伝記はない。又, これを明確に語る H. James 自身の言葉もみあたらない。また伝記を詳細に調べてみても女性との間に特殊な交渉があった事もないようである。洗練された態度と名声

との持主であった H. James に多くの女性の友があった事実は伝記を読めばわかるように当然の事である。只、筆者には、Minny との運命的な死別が、かえって、James の文学的特質を形成する奇縁とも云うべき出来事のように思える。

IV

1870年を、Robert C. Le Clair も、James の “The End of Youth” と考えており、Leon Edel も “The Untried Years の最後の年としてしめくくっている。とにかく、Minny との死別の年は、若き Henry James の物語りの終る年としてよからう。文筆の仕事として、1868年に書いた短篇 “*Garielle de Bergerac*” の事については、書き留めておかねばならない。1868年11月15日 William Dean Howells から Charles Eliot Norton に送った手紙中の次の記事は、此の作品が習作時代のものの中では上出来であったことを物語っているものである。即ち、 “Harry James has been here and left the manuscript of a story which he read me a week ago—the best thing, as I always say, that he has done yet. He seems in firmer health than ever, and is full of works and purposes.” James の習作時代が、このあたりで終りを告げ、国際小説家として出発する期へ移ることになる。1870年、Minny の死を聞いた年、アメリカに帰る。その翌年 “Watch and ward” (1871) を発表する。これが、James の最初の長篇なのだが、作者自身気に入らなかったとみえて、後年、全集版から除外して “Roderick Hadson” (1876) を最初の長篇だと言っていたのである。 “Watch and Ward” を書いた同じ年に、劇作としては最初のものと思われる “Still Water” と云う短劇を書いていることは注目すべきである。James は年少の頃から、既に、すばらしい演劇の愛好者であり、8・9才頃から芝居見物を度度している。劇愛好家、或は、芝居通の James の姿は、自伝的物語「少年とその他の人達」 “A Small Boy and Others” (1913) と長篇小説「悲劇の詩神」 “The Tragic Muse” (1890) を読んでみればわかる。「静かなる水」 “Still Water”

は軽い一幕物ではあるが、その筋 (Plot) が短篇小説 “A Most Extraordinary Case” (1868) や “The Story of a Year” (1865) とよく似ていて、又後期の作品、殊に劇では “Guy Domville” の situation を予示するものとして特に興味がある。¹²⁾ 1872年、妹 Alice と叔母 Katherine Walsh とヨーロッパを旅行する。1872年から1874年へかけての2年間では、ヨーロッパ旅行記と、作品として “The Madonna of the Future” が注目すべきであろう。

1874年から75年へかけて、冬を New York で過していた James は、ヨーロッパに永住すべきかしきりに考えていた。そして、いよいよ、ヨーロッパに永住する積りで、パリへ向って祖国アメリカを離れたのである。この時、James 33才であった。此の年から向う二ケ年1876年迄は James に取って、文学のみのりの最も豊かな時期である。1876年、フランスでは、フロオバールを旗頭とする the Flaubert circle に会うことになる。Flaubert, Gustave (1821—80, Maupassant, Henri-René-Albert-Guy de 1850—93), Brother Goncourt (Edmond-Louis-Amtoine 1822—96; Jules-Alfred, Huot de 1830—70), Zola, Emile (1840—1902), Baudet, Alphonse 1840—1920) その他に出会う。そして Turgenev, Ivan (1818—83) に出会う。(James は彼の評論集で、Turgenev を用いずに、Turgenieff の方を採用している。) 12月、ロンドンへ居を移してから、Tennyson, Alfred (1809—92), Browning, Robert (1812—89), Ruskin, John (1819—1900), Eliot, George (1819—80), Morris, Willam (1834—96) らに会う。長篇小説 “Roderic Hudson” が此の年に出る。又、長篇 “The American” の創作に打ち込んだ年でもある。1877年には、 “The American”, 1878年には “The European”, “An International Episode”, “Daisy Miller”, 評論 “French Poets and Novelists” が出て、James の人気、文名が大いに高められたのである。

1876年、フランスのパリーに來た時は、最早、さすらいの身として異郷に來たと云う感は無論なく、そこには社交があった。前述のように、Fla-

ubert に紹介された。パリーにいたアメリカ人達を James は多数知っていたが、余り親しみも興味ももてなかった。そのアメリカ人達は余りに社交的であったし、フロオベール・サークルの人達は皮肉で毒舌的であった。此の the Flaubert circle の催す会合に出席しても、これらのリアリスト達の排他的な態度には気持があわなかったのである。此のサークルのうちで只一人、「偉大なムジロ（ロシア農民と云う意味）」と Flaubert が呼んでいた Ivan Turgenev とは、甚だ意気投合したのである。此の James と Turgenev 二人が、cosmopolitan であり、exile であり、artist であった事など思い合せてみればわかる。Flaubert に James を紹介したのも此の人であり、James が Turgenev と知り合いになった事は、パリー滞在中の the great human event である。この事は James の生涯に於て得難い出来事であり、James が、受けた影響は少くなかったと云えよう。Turgenev は artist であったばかりでなく gentleman でもあった。かつて、James は F. M. Hueffer に次のように云った事がある “Ah, he was the real...but a thousand times the only — the only real, beautiful genius!”¹³⁾ 此の二人は性格として melancholiac などとも似ていたのではないだろうか。James が、Turgenev を尊敬したのは勿論その文学的才能であろうが、その技巧の点であると同時に、Turgenev が、上述のフランスのリアリスト達とくらべて moralistic であった点にあると云える。¹⁴⁾ とにかく、James が Turgenev に会った事は、交友と云う点から云っても、文学作風への影響の点から云っても確かに the great human event であった。

V

Turgenev にパリーで会ったのは、1876年だが、それまでに James が Turgenev の諸作品を読んでいた事は次の James の手紙が立証する。James は、1878年8月24日付の W. E. Henley 宛の手紙の中に次のように書き留めている。

“... — I like the idea of “helping” any one, in any degree, to read Turgenieff : but I am

afraid the assistance I can now render you will not see valuable. I am sorry to say I have none of Turgenieff’s works near me at present — I possess the whole collection, but it is no nearer than America. Many of them I read in one of the German translations, the best of which is the best of any”¹⁵⁾

又、James は “The Portrait of a Lady” (1981年) の自序の中に、Turgenev の作風について次のように書いているところがある。

“I have always fondly remembered a remark that I heard fall years ago from the lips of Ivan Turgenieff in regard to his own experience of the usual origin of the fictive. It began for him almost always with the vision of some person or persons. who hovered before him, soliciting him, as the active or passive figure, interesting him and appealing to him just as they were and by what they were. He saw them, in that fashion as *disponibles*, saw them subject to the chances vividly, but then had to find for them the right relations, those that would most bring them out; to imagine, to invent and select and piece together the situations most useful and favourable to the sense of the creatures themselves, the complications they would be most likely to produce and to feel.”¹⁶⁾

ここに、James が Turgenev の作風として述べていることは、初期に於て国際的テーマを主とした James の諸作品にあらわれる作風でもある。創作をなす場合、いつも発端となるのは、或る人物、又は、人物達が自分の心に浮ぶ姿から起るのであって、それら人物が、能動的にしても、受動的にしても、色色の廻り合せ、人生の紛糾にまき込まれ易いものとして観察する。そして、それら人物が顕わす適切な諸関係を探し求める。それら人物の独自の分別を働かすのに最も役立ち都合のよい境地を考える。これら人物が、心を動かす紛糾を考え出して、それを取捨選択して創作を進めて行くと云う方法なのである。此の方法は、一口に云えば、性格描写を主とする作風である。即ち、作品の構成或は筋 (Plot) は最少限度にとどめて、人物を最もよく導き出すような諸関係や、人物の印象を有効に伝えるような場合を見つけようとする創作方法であり、作風であるが、James

は此のような作風を学び取って、此の時期には、自分の作品に応用しているようである。自分の興味をひく人物を捉えて来て、その人物自身の世界の中で、活動させようとした。技巧の点では、このような影響を受けているようである。(けれども大体1890年頃、此の種の作品の素材と方法に自ら疑問をもちはじめた頃、James は独自の方法に入って行こうとする。)

此の時期に James が受けた影響の他の一つは、フランスのリアリスト達からのものであろう。だが、注意すべきことは、それが、ほとんど小説に於ける技巧の問題であつたと云うことであらう。James はその人達から大いに学ぶところはあったろうけれども、その人達と同じ意味でのリアリストではなかった。¹⁷⁾ Flaubert 以後、どの作家もリアリズムの小説をそれ以上発展させることは出来ないと信じていた。新しい創作方法をもって、小説の型を創り出そうと試みた。その創作方法は、素材を国際的な人達と、又、それらの人達が醸し出す特殊な心理に求め、このような型の心理を直観力と洞察力をもって追求することであつた。この点は、明かに、James 文学の特徴と云うべきものであつて、James 以前の文学に此の種の型の心理追求はないことはなかったろうが、James の行ったような念入りな型のものはなかった。純真で清潔なアメリカ人が出会う国際的悲劇(或は *The European* など)は、むしろ気のきいた喜劇である。)をテーマとする James 初期の諸作品(アメリカ、ヨーロッパ両文明の出会いと葛藤の国際的テーマは後期の此の種の諸作品に掘り下げて用いられるのである。)は新しい境地を発見したと云う意味でも James の功績であると云える。文学史上、このような功績を残すに至る運命が、あの生い立ちからの父の教育につながるものであつて、これも、生い立ちから *Cosmopolitan* としての生活と感覚と思想と関連するものであり、James の内に潜む American Henry James と *Cosmopolitan* Henry James との対立の矛盾と密結するものである。

Ⅶ

James の第一期或は初期(筆者は1881年 "*The Portrait of a Lady*"迄としている)で、人気と文名を高めたものは、国際的テーマの諸作品であつた。此等の作品に出場するアメリカ人は純真(*innocent*)で称賛すべき型の人物として描かれる。そして出場するヨーロッパ人やヨーロッパ化されたアメリカ人は、すれつからしの、或は悪ずれした(*sophisticated*)型の人物が多いのである。これは James の作品を読む時に注意すべき事であつて、ヨーロッパの文化は高く評価されるけれども描くヨーロッパ人は道徳的には墜落したものとして描くことが多い。"*Roderick Hudson*"(1874年)、"*The American*"(1875年) "*Four Meetings*"(1877年)、"*The European*"(1878年) "*Daisy Miller*"(1878年)、"*The Portrait of a Lady*"(1881年)など皆此の種の作品である。

"*Roderick Hudson*"は、アメリカ北部の田舎町の青年彫刻家である Roderick の天分を発見した裕福な Rowland Mallet は芸術修業のため、Roderick をローマに連れて行く。初めは熱心に修業を続けていたが、Christina Light という父親がイタリア人で母親がアメリカ人の美しい娘に会う。此の娘は、両親に連れられて、婿さがしにローマに来ているのである。Roderick は、その娘の胸像までつくり懇意となり、アメリカを立つ前、婚約した Mary の事を忘れて Christina に迷う。両親は Christina を Casamassima 公爵と結婚させてしまう。Hudson は絶望の余り、創作心も消えてしまう。ある暴風雨の日アルプス山中で自殺とも不慮の死ともわからぬ死をとげるのである。Rowland が、Roderick の「器から水を飲む青年の像」をみてたずねる。"*Do you mean anything by your young water-drinker? Does he represent an idea? Is he a symbol?*"すると、Roderickが、こう答える。"*Why, he's youth, you know, he's innocence, he's health, he's curiosity, Yes, he's a good many things*"そして、その cup は "*knowledge, pleasure, experience — anything of that kind.*"だとつけ加える。■此の naïve な青年にとっては a vast

opium den とみなしうるヨーロッパに於て、ヨーロッパ型の Christina に翻弄されるのである。“Roderick Hudson”の自序のなかで、James が創作法を述べていることは“story idea”が心に浮んだ後に起るその“developments”を正確に限定する方法の決定であった。ヨーロッパ文明の病毒 (European Virus-effete civilisation) に感染している母親にさえ理解しかねる Christina の行動を James は見事に描いている。事物や人事の相互関係は、人生では一瞬の休止もないのである。しかもこの動いて止まないものを捕えて持続感を保たせようとすることは容易の業ではない。人生と云う広い布に無数の糸を通して、模様を縫い込む刺繍師のように無数の針を通すことと、周到な取捨選択とが必要である。Mallet の意識を通して物語に統一と運動と意味をあたえようとする。Mallet を介在させるという間接的な立場に立つと、対象の真の姿が見え易くなる。更に、中心人物の意中を打明ける二人の未亡人 (Cecilia と Grandoni) をコンフィダント (confidant) として設定しているが、此の設定も、所謂、間接法であって、此のような作法は後の作品の先駆として、James の作風と考えられる。

“The American”は重要な作品であるから、特にその作風と読み方について拙稿『『アメリカ人』をどのように読むか——初期 H. James のロマン主義と清教主義』(関西学院大学「論攷」第7号)に詳細に論述したからその方にゆずる。

“The psychological analysis of the conflict between decadent aristocracy (France) and virile commercialism (America)”¹⁸⁾が、この作品のテーマである。主人公 Christopher Newman (新しい人)と云う名は甚だ象徴的で、ヨーロッパと云う旧大陸とはちがった新大陸の生んだ新しい型の人 (実業家)をあらわそうとしているのである。後年劇化して可なり成功したものである。¹⁹⁾

“The Four Meetings”は短篇だがよく出来たものである。これは、やはり、国際的テーマのもののだが、軽妙なユーモアと諷刺が利いた作品であ

る。“I”「私」と云う人が Miss Caroline Spencer と云う女の先生に四度めぐり合う話である。此の人は永年ヨーロッパ旅行を夢みていたが、ようやく旅費も溜ったので旅立ち、ル・アーブル (Le Harve) の港に上陸する。そこで、美術研究のためフランスに来ているのだが、或る伯爵未亡人と称する女と邂逅結婚をして金に困っている従兄の出迎えをうける。此の男が道徳的に墜落したヨーロッパ型の人物であるが、此の男から所持金の大部分をたくみに捲き上げられてしまうのである。上陸して僅か十三時間、ヨーロッパの断片をみたきりで、止むなく、帰国する。New England に帰って、再び、ヨーロッパへ行ける日もあろうと質素な暮しをしていると、突然従兄が死んだと云って、その伯爵未亡人と称する女がたよって来て同居することになる。こうして皮肉にもあこがれのヨーロッパが (此の未亡人を通して) 見物出来るようになったと云う物語である。同情すべき Miss Caroline Spencer を諷刺の対象とした事に問題がありそうだが、James の不偏の描写のために、かえって、此の心根のやさしい女性に読者は同情をおくことになるのではなからうか。此の短篇に用いられた手法が更に発展し洗練されて出来たものは後期の大作 “The Ambassadors” (1903年) と “The Golden Bowl” (1904年) とであろう。

“The European” (1875年) は国際的テーマを取り扱っているが、悲劇でなく軽い喜劇である。洒落な喜劇であるが、兄 William から、「薄っぺらでからっぽ」(‘thin’ and ‘empty’) と云う批評を手紙で受けたもので、James は「作品をあまり想像をぬきにして厳格に考えられるからだと思います。しかし、あなたがこの作を薄っぺらでからっぽだと評されるのはまちがっていません。」と答えたばかりでなく、自分から全集中に加えなかったものである。此の作品は、筋 (Plot) と云う程のものはないので、ヨーロッパ生れの Felix Young と、その姉で男爵夫人 (Baroness Münster) Eugenia (夫との不和のため幸運をもとめて) 二人が Boston の親戚の家に来て、暫く逗留する間に於ける恋愛事件など織りまぜ、新世界アメリカ

と旧世界ヨーロッパの相違を(物の見方を通して)対照的に描いたので、Jamesとしては、めずらしく、諧謔を弄した作品で、読んでおもしろいが、‘thin’and ‘empty’ のそしりをまぬがれぬものである。だが大変、艶のある文体に出会う。

“Daisy Miller” は、最も有名な短篇で、一般の読者の人気をあつめたものであって、多くの人のよく知るものである。ここでは紙数の関係上省略する。只一言述べて置きたいのは此の短篇が愛読された理由であるが、それはむづかしい理論からでなく(一般の読者には理論は必要でない)この作品のもつロマン性と抒情性、或は抒情的雰囲気にあったと云っても過言ではない。後年、作者は人気挽回のため劇作に手を出した時期²⁰⁾に、此の短篇を喜劇化したことがあるが、成功していない。

“The Portrait of a Lady” は、国際的テーマのもののうち、傑作とされるもので、F. R. Leavis が “The Great Tradition”²¹⁾ の中で激称しているもので、Flaubert の “Madame Bovary” (1857年) にも匹敵すべき作品と云っても過言ではないように筆者にも思える。多くの問題を含む作品であるから別に作品論として詳細に論評してみたいと思っている。その解説は、やや詳しく拙稿「Henry James 国際的テーマ小説の問題点—1871—1881年間の作品と作風—」(関西学院大学「論攷」第8号) に述べておいた。此の作品中の女性 Isabel Archer と James の従姉 Minny Temple との対照は甚だ興味がある。²²⁾

猶、テーマは国際的なものではないが James として傑作の “Washington Square” (1881年) があるが、これも多くの読者に知られたものである。此の作品は他人の手で 1947 年 New York で劇化上演されて成功し、1949年には映画化されて成功したものである。他人の手で劇化されたものが成功するのは James にとって皮肉である。丁度 1959 年 James の “The Aspern Papers” が Michael Redgrave の手によって喜劇化され London で成功したように。

Ⅶ

1881年、James は “The Portrait of a Lady” を書いて、自己の作品の水準を向上させた。James が此の作品を書くまでは、作家としての性格の成長と形成の時期であったと云える。此の “The Portrait of a Lady” の出版とともに、ヨーロッパ小説の形式が英文学にとりいれられ、James 自身が偉大な小説家となった訳である。1881年から数年は、James は作品よりも生活に関心をよせているようである。1882年には、2月に母と死別し、12月には父をも失い、1883年には又又英国へ帰って行った。1879年の “Hawthorne” の評伝²³⁾ の中で、Hawthorne 程、人生が何をもたらすだろうかを、熱情的に忍耐強く渴望した天才的な青年はなかったと云っているが、これは又、James 自身のことでもあろう。James は、ヨーロッパでの生活と創作の実験に妨げられることのなかった数年間を想起しているのであろう。James が、幼時より新鮮な目でヨーロッパをみ、ヨーロッパで教育を受け、ヨーロッパの精神文化の泉で洗礼を受けたこと〔(Ⅰ)に於て詳述したもの〕は James の生涯に於ての事件であり、又、James の生涯の事件が文学と作風に影響を与えた最初のものと考えることが出来る。cosmopolitan として、外的、内的な経験、殊に内的に潜む対立と矛盾の葛藤が、国際的テーマの小説を書かせるに至つたとも云い得る²⁴⁾。ヨーロッパに於けるアメリカ人に何が起るか。ヨーロッパ人或はヨーロッパ化されたアメリカ人はアメリカ人に対して何をするか。ヨーロッパ人はアメリカ人を何う変えるか、又何を与えるか。両者の衝突で何が起るか、など。これらのテーマを充分書き得たのは、James が生活した過程で(自国は勿論のこと、ヨーロッパに於て)豊富な主題や因習や伝統や境遇に幸運にも遭遇したからである。国際的なテーマは James のような生涯を経た人にとって、しかも芸術を自己の天職と考えていた James のような作家にとって、最も相応しいものとなったのである。更に、(Ⅰ)に於て評述した James の若き頃の負傷と、(Ⅱ)に於ける Minny Temple との死

別とは、James の生活をますます芸術への献身にかりたてて行った事。それに、成長形成期に James に与えた先達の文学者作家達の影響。特に、(Ⅳ)に於て論じた the Flaubert circle のリアリスト達と交際接触は James に諸種の影響を与えた事になるが遂に、James は、James の芸術を創ることになる。しかもフランスのリアリスト達が抱いていた「芸術 (art) と道徳 (morality) とは二者まったく異ったもので、芸術が道徳と関係がないのは、天文学 (astronomy) や発生学 (embryology) が道徳と関係がないのと同じだ」と云う信条とは根本的に相入れないものがあったのであった。James はあくまで広い意味での「道徳性」を重要視していたのであり、James の作品を読むものは、Turgenev の場合と同様に、そこに常に、‘deep moral note’ に充ちているのに気づくであろうと思う。

(36. 7. 15)

- 註 1) “Henry James” by F. W. Dupee, 1951. William Sloane Associates. p. 3.
 2) “Henry James” The Portable, Edited and with an Introduction by M. D. Zabel, 1951 The Viking Press. p. 1—2.
 3) (a) “The Letters of Henry James” by Percy Lubbock. 2 Vols, 1920 Macmillan.
 (b) “The Notebooks of Henry James,” Edited with an Introduction and Commentary by F. O. Matthiessen and Kenneth B. Murdock, 1955 George Braziller.
 (c) “Henry James — autobiography,” Edited with an Introduction by F. W. Dupee, 1956 Criterion Books.
 4) 3) (C) と同書。
 5) “The Legend of the Master (Henry James)” Compiled by S. Nowell-Smith, 1947 Constable and Company Ltd. p. 19.

- 6) “Young Henry James 1843—1870,” by R. C. Le Clair, 1955 Bookman Associates. p. 345—347.
 7) 6) と同書 p. 356.
 8) 6) と同書 p. 384.
 9) “Henry James — The Major Phase” by F. O. Matthiessen, 1946 Oxford U. P. p. 49.
 10) 拙稿 “Henry James と Mary (Minnie) Temple” — H. James の生涯と作風 (関西学院大学「英米文学」第 6 巻第 1 号.)
 11) 10) の拙稿中に詳述。
 12) 拙稿「Henry James—“Guy Domville”を中心として」(「関西学院大学英米文学第 2 巻第 2 号」) と拙稿「Henry James 1890—95」(関西大学英文学会「英学」第 1 巻第 5 号) に詳述。
 13) 5) り同書 p. 75.
 14) 拙稿「文学に於ける影響の問題—H. James の場合」(関西学院大学「英米文学」第 4 巻第 1 号)
 15) “The Selected letters of Henry James” Edited with an Introduction by Leon Edel, 1955 Farrar, Straus and Cudahy. p. 72.
 16) “The Art of the Novel by Henry James” with an Introduction by Richard P. Blackmur, 1953 Charles Scribner’s Sons, p. 42—43.
 17) 拙稿「『アメリカ人』をどのように読むか—初期 H. James のロマン主義と清教主義—」(関西学院大学「論攷」第 7 号)
 18) “Recent American Literature” by Donald Heiney, 1958 Barron’s Educational Series. p. 33.
 19) 拙稿 12) に詳述。
 20) 拙稿 12)
 21) “The Great Tradition” by F. R. Leavis. 1950, Chatto and Windus. Ⅲ. Henry James の項。
 22) 拙稿 10) と同じものの中に詳述。
 23) “Hawthorne” by Henry James. 1956, Great Seal Books.
 24) H. James 国際的テーマ小説については拙稿「Henry James 国際的テーマ小説の問題点」(関西学院大学「論攷」第 8 号) に詳述。